

2025年11月03日～11月19日 全9回

「佛教の中國化」から見た中國中世佛教

"Sinification of Buddhism" in medieval China

船山 徹 Funayama Tōru

「佛教の中國化（Sinification of Buddhism）」は、梵語・パーリ語等のインド語で表記された原典を古典漢語に翻譯したことによる中國的特色を示す現代語である。敢えて單純化するならば、「佛教の中國化」は、インド佛教と區別すべき中國佛教の特色と、そのような變化を伴う中國佛教の實態を意味する。中國佛教にはインド佛教の繼承と、中國特有の相違（發展と歪曲）の兩方が内在した。後者の中國的特性を示す語が「佛教の中國化」である。極端に言えば、佛典を漢譯した瞬間から中國化は始まった。本講義は、このような「佛教の中國化」を表す諸事象の「具體的な例示」と、そこから歸結される「中國化の總合的特徴」を解明することを目指す。

① 11月03日（月）

序論

序論（１）中國佛教の二大特色

第一、中國には大乘佛教だけが存在し、聲聞（小乗の徒）はいなかった點で、インドとも南方佛教とも違っていた。インドでは聲聞の戒を認めることから始まるから、聲聞乘（小乗）の上に大乘を積み上げる構造を有した。そしてスリランカと東南アジアの南傳佛教には大乘佛教徒が存在した時代もあったが、大乘の影響を意圖的に除去し、大乘を認めない聲聞至上主義を表明した。

第二、中國佛教は梵語（インド學術の正統語であるサンスクリット語）を用いず、専ら漢語に基づき、漢字文化を保持した。インド文明と中國文明は並列關係にあり、

優劣關係を否定した。その結果、中國佛教は漢語のみで思考し論說した點で、文化の優劣を認めたチベット佛教（チベットはインド文化を優勢と見做した）や日本佛教（日本は漢文化を優勢と見做した）と全く異なる性格を示す。

序論（２） 「中國化」 （sinification） とは何か？

- 1 「中國化」の意味＝中國的に變化する（こと）＝中國的に變容する（こと）
英語表記： sinification, sinicization

佛教に關する中國化を sinicization と呼び、軍事・政治・（佛教以外の）文化に關する中國化を sinification と呼ぶと、二つの英語を區別する場合もあるが、しかし一般には、兩者を區別せず、sinification という一つの英単語で二つの意味の兩方を表す（Kieschnick キーシニック 2010）。

- 2 「中國化」という語は外來語である。中國から發生した語ではない。

「漢化」という傳統語は「中國化」とほぼ同義である。しかし現在、論文で使用する語は専ら「中國語」であり、「漢化」は主流ではない。

何故か。「中國化」は西洋語 sinification / sinicization の譯語であるから。

3 「中國化」を論ずる研究に二種類の方向性がある

A 中國人の方立天 Fang Litian (2005、2007他) は「中國化」を用いる。
日本人の Uejima 上島 (2010) の論文題名は「佛教の日本化」である。

- ⇒ この二人は、「中國化」と「日本化」を定義しないで用いる。
何か或る事柄を説明する時、説明不要な既知の語彙として用いる。
更に、この二人は「中國化」「日本化」と對比すべき概念や事例を
挙げない。中國とインド、日本と中國の比較を全くしない。
- ⇒ 中國化も日本化もそれぞれ中國の内部、日本の内部に視点を向け、
中國を外から（インド・東南アジア・日本）から見る論述をしない。
日本を外から（中國・朝鮮半島）から見る論述もしない。
私（船山徹）が讀解した限り、方立天の「中國化」は中國佛教の
特色を意味する。同様に上島の「日本化」も日本佛教の形成史を
意味するだけである。共に他と比較せずに対象を内側から論ずる。

B Gimello ジメロ (1978) は "Sinicization of Buddhism" = 「佛教中國化」の意味と適用可能な範囲を自らと読者に問う。その際、「佛教中國化」を「中國のインド化」="Indianization of China" と對比する。佛教は土着の中國思想でなく、インドに發生した。その意味で "Sinicization of Buddhism" は、佛教というインド思想・文化が中國で變容した様子进行意味する。その後、アメリカにはJohn Kieschnick 柯嘉豪 (2010) が現れ、「佛教中國化」(sinification of Buddhism) を「佛教漢化」と言い換えた。キーシニックの研究は、中國化を漢化と同義語であると述べる珍しい研究である。

4 「中國化」は、中國を「その外から」觀察する視點を必要とする (私見)

「中國化」を論ずる時に必要不可欠な事柄：

中國を、その外側から俯瞰する = 中國を外から客觀的に觀察する
 = 中國文化と他国文化を對比する眼

⇒ 中國人には見えにくい中國文化がある ⇒ 外國人の視點が有意義である

5 本講の「中國化」は、Gimello+Kieschnick に倣い、外から見た「中國化」

中世佛教史の場合、最も主たる「外」は、インド文化である

インド文化と中國文化は、共存する世界の大文化であり、立場は對等であって、優劣関係には無かった。⇒ 佛教が外部に波及した歴史と不可分な重要性

後に、佛教は中國から日本に傳わった。言語的・文化的に見ると、中國と日本には、上下関係・優劣関係がある。日本は、使用言語に漢語を使いながらも、漢語を和語に變えずにそのまま用い、返點（かえりてん）・一二點などの訓點を補足して文字を読む順序を變えるだけに止め、日本語より漢語を優位とした。

同じくチベット人も、言語的にインドに従属した。文字も、チベット語への翻譯法も、インドのサンスクリット語を上位に、自語を下位に置いた結果である。

6 中國宗教思想の特色（福永光司 Fukunaga Mitsuji 説）：

“中國の宗教思想は、二分法に基づく二者擇一の論法よりも、「兩行」（矛盾對立物の同時存在の容認——『莊子』齊物論篇の語）、「混成」（複合原理の尊重——『老子』第二十五章の語）と集大成（「大全」「大體」の立場に立つ總合總括處理の重視——「大全」は『莊子』田子方篇、「大體」は同じく天下篇、「集大成」は『孟子』萬章篇下の語）の思惟方法をその特質とする”（Fukunaga 1990: 54）

7 福永が指摘する中國的「兩行」思考を表す二項目：

- 1 人と神（有神と無神、祭祀と祈禱、罪と罰、迷と悟）
- 2 時間と存在（始と終、古と今、長と短、大と小、内と外）
- 3 存在と理法（陰と陽、體と用、物と心、不易と流行、自然と因果、有と無、無と空、無と道）
- 4 自と他（我と物、一と多、本と末、獨善と兼濟、真人と聖人）
- 5 行為と價值（善と惡、知と行、道と技、言と默、往と還、頓と漸）

福永説：これらは、二項對立の原理ではない。これらは統一融合の原理である

8 インドから見た「佛教中國化」の諸相

中國は、佛教をインドから取り入れたが、それによってインド文化に屈服する事態にはならなかった。對等・均等の大文明として、

（1）漢譯における中國化の現れ方

中國人は、佛典を正確に翻譯するために、自らの漢語文法をインドの言葉に合わせて改變するという妥協を許さなかった（チベット語譯と大きな相違）。

⇒ チベット語とは異なる漢譯の特徴は何か。

(2) 中國化には、抽象的で目に見えない次元の中國化と、見たり聞いたりできる五感の次元の中國化という、少なくとも二種類の中國化があった

佛教の抽象的な中國化
(見たり聞いたりできない)

- ① 漢譯技術に現れた中國化
- ② 佛典の編輯・叢書化に現れた中國化
- ③ 佛典の注釋に現れた中國化

佛教の具象的な中國化
(見たり聞いたりできる)

- ④ 衣食住の衣として僧衣に現れた中國化
- ⑤ 佛教食生活に現れた中國化
- ⑥ 住環境と建築技術に現れた佛教の影響

② 11月04日（火）

「漢譯佛典」に見られる「佛教中國化」の諸相

（１）「經典の三種分類法」（本講義9回を通して用いる）

漢語で表記された經典（sūtra = scripture）の分類法：

従來の二種分類と、船山徹の三種分類（Funayama 2002, 2013）

従 來 の 二 種 分 類		船 山 徹 の 三 種 分 類		
漢譯經典 = Chinese Buddhist translations = CBT	偽經 = Chinese Buddhist Apocrypha = CBA	漢譯經典 Chinese Buddhist translations = CBT	編輯經典 Chinese Buddhist Compilation Scriptures = CBCS	偽經 Chinese Buddhist Apocrypha = CBA
Made in India, Translated in China	Made in China = Pseudo-sūtras	Made in India, Translated in China	Made in India, Assembled in China	Made in China = Pseudo-sūtras
例：鳩摩羅什譯『維摩詰所說經』、『金剛般若波羅蜜經』	例：失譯『大方便佛報恩經』、『提謂波利經』	例：鳩摩羅什譯『維摩詰所說經』、『金剛般若波羅蜜經』	例：鳩摩羅什譯『大智度論』	例：失譯『大方便佛報恩經』、『提謂波利經』
インド語原典を （逐語的に）漢譯した經典	中國で偽作した經典	インド語原典を （逐語的に）漢譯した經典	インド原典の素材を用いて中國 で新たに編輯した經典	中國で故意に偽作した經典
中國佛教文獻であると共にイン ド佛教の資料でもある	中國仏教資料であり、インド佛 教資料とはならない	中國佛教文獻であると共にイン ド佛教の資料でもある	構成要素はインド佛教資料とな るが、全體の構成は中國資料	中國仏教資料として價值が高い が、インド佛教資料ではない
〔漢譯經、漢譯律、漢譯論〕	〔偽經、偽律、偽論〕	〔漢譯經、漢譯律、漢譯論〕	〔編輯經、編輯律、編輯論〕	〔偽經、偽律、偽論〕

(2) 「偽經」とは何か？

Funayama (2015: 283) :

The term “Chinese Buddhist apocrypha” refers to those scriptures, or the genre of such scriptures, that while appearing in form to be purely the Chinese translation of a scripture (or *sūtra*) originating in India **were in fact composed in China**. These texts follow the style of authentic translations of Indian Buddhist scriptures, usually beginning with the formula “Thus have I heard” (Skt. *evaṃ mayā śrutam*; Chn. *rushi wo wen* [如是我聞] or *wen rushi* [聞如是] as an earlier form). Scholars thus generally use the term Chinese Buddhist apocrypha to mean “***sūtras composed in China.***” The use of the word “apocrypha” is merely conventional, and it does not exactly match the original meaning in the Judeo-Christian context.

中國佛教の術語

「真經」：インド原典の逐語的漢譯經典。インド大乘經典を含む



「偽經」：非漢譯經典＝偽作經典＝中國化經典。様々な中國文化・思想要素を内含

【比較參照】 次の一節に見られる方廣鋁の偽經の定義は極めて特異！

通常は中國思想を含む『四天王經』を偽經と考える說に對する方廣鋁氏の反論

方廣鋁「從《劉師禮文》談中印文化的匯流」（『國際佛教學大學院大學研究紀要』11, 2007, p. 203）：

《四天王經》既然是翻譯典籍，何以深受中國傳統文化的影響？這涉及到筆者近年來非常關注的問題，即佛教的發展，並非印度文化單純的自我演化，而是包括中國文化、西亞文化等廣大亞洲文化共同匯流的結果。具體到《四天王經》，很顯然，這是中國文化傳入西域、傳入印度，與西域、印度的佛教文化相結合的典型事例。這一文化匯流的產物又回傳中國，被翻譯成漢文。因此，我曾經撰文說：“佛教的產生雖然得益于印度文化的孕育，而佛教的發展則得益于印度文化、中國文化乃至其他地區文化的匯流。也就是說，中國是佛教的第二故鄉，這不僅體現在現實的結果中，也體現在歷史的過程中¹⁸。”

(2) 「漢譯經典=Chinese Buddhist Translations」とは何か

原則として、インド起源の原典（サンスクリット語原典、パーリ語原典など）の逐語的な直譯である

⇒ 漢譯經典における「中國化＝中國的變更」は、非常に少ない

しかし「中國化」と關聯する漢譯經典も時々存在する

直譯が難しい場合は、譯者は、全體の意味が變わらないように譯すことに苦慮する

⇒ その結果、譯者の漢譯は大膽に言い換えた譯（≈自由譯）を示す場合もある

⇒ このような「大膽な譯」は次の二局面に現れる：

(A) 意味を適譯できない場合、意味不明の音譯（phonetic transcription）に止める

(B) 逐語的な譯よりも直觀的に瞬時に理解できる、漢文化に特有の語がある

このうちで (B) に相當する漢譯經典の語彙は「佛教中國化」に直結する

(3) 普通、漢譯の語彙は、義譯（意味譯）と音譯（音寫語）の二種に大別される
しかし二種でなく、次の三種に分類すると、譯語の種類を理解し易い（船山說）

① 義譯語（意味譯） dharma→ 法、prajñā→ 智慧、nirvāṇa→ 滅度

原語の意味を愚直にそのまま漢語に逐語譯する場合

② 音譯語（音寫語） Jambūdīvīpa → 閻浮提、saṅgha→僧伽、prajñā→ 般若

原語の意味を譯せない場合と譯さない方が効果的な場合の2種あり

③ 文化對應型譯語 nirvāṇa→ 無為（道家語） Cf. 義譯「滅度」、音譯「涅槃」

直譯よりも中國人に nāga（蛇, serpent / cobra）→ 龍 (Chinese dragon)

直觀的に理解可能な amṛta（不死の〔飲物〕）→ 甘露（美味の雨露）

適譯がある場合 bodhi（目覺め/悟り）→ 道（Way, 道家語・儒家語）

=原語と意味は全く違っても中国文化の中に最適の語があれば、敢えて大膽に活用

(Funayama 2013)

參照研究

- Chen (1973) Kenneth K.S. Ch'en, *The Chinese transformation of Buddhism*, Princeton, N.J. : Princeton University Press.
- Fang Litian (2005) 方立天「慧遠與佛教中國化」，『中國人民大學學報』2005 年 1 期, pp. 28-32.
- Fang Litian (2007) 方立天「慧能創立禪宗與佛教中國化」，『哲學研究』2007 年 4 期.
- Fukunaga (1990) 福永光司 Fukunaga Mitsuji 「Chūgoku shūkyō shisō shi 中國宗教思想史」，『Iwanami kōza Tōyō shisō dai jūsan kan Chūgoku shūkyō shisō ichi 岩波講座 ■ 東洋思想 第一三卷 中國宗教思想 1 』，Tokyō: Iwanami shoten 岩波書店, pp. 1-158.

- Funayama (2002) 船山徹 Funayama Tōru 「"Kan'yaku" to "chūgoku senjutsu" no aida: kanbun butten ni tokuyū na keitai o megutte 「漢譯」と中國撰述」の間：漢文佛典に特有な形態をめぐって」, 『*Bukkyō shi gaku kenkyū* 佛教史學研究』 45/1, pp. 1-28.
- Funayama (2013) 船山徹 『*Butten wa dou kan'yaku sareta no ka: sūtoraga kyōten ni naru toki* 佛典はどう漢譯されたのか：スートラが經典になるとき』, Tokyō: Iwanami shoten.
- Funayama (2015) Toru Funayama, "Chinese Buddhist Apocrypha." In *Brill's Encyclopedia of Buddhism, Vol. 1: Literature and Languages*, edited by Jonathan A. Silk, Leiden: Brill, 2015, pp. 283-291.
- Funayama (2020) 船山徹 『*Bosatsu to shite ikiru* 菩薩として生きる』, Kyoto: Rinsen shoten 臨川書店.

- Funayama (2024) 船山徹 「Kan'yaku dekinai go o dōsuru ka: Tō no Genjō/Xuanzang ni takusareta "go fuhon" setsu no sai kentō 漢譯できない語をどうするか：唐の玄奘に託された「五不翻」説の再検討」, 『*Tōhō gakuhō* 東方學報』 Kyōto 京都 99, pp. 342-282.
- Funayama (2025) 船山徹 (著), Shi Jianhong 釋見弘、Chen Tao 陳陶 (譯) 『*Liuchao Sui Tang Fojiao zhankai shi* 六朝隋唐佛教展開史』, Taipei 臺北: Fagu wenhua 法鼓文化.
- Gimello (1978) Robert Gimello, "Random Reflections on the 'Sinicization' of Buddhism," *Society for the Study of Chinese Religions Bulletin* 4, pp. 52-89.
- Gregory (2002) Peter Gregory, *Tsung-mi and the Sinification of Buddhism*, Honolulu: University of Hawaii Press.

- Kieschnick (2003) John Kieschnick, *The Impact of Buddhism on Chinese Material Culture*, Princeton, N.J. : Princeton University Press.
- Kieschnick (2010) 柯嘉豪 John Kieschnick, "Guanyu Fojiao hanhua de xinsi 關於佛教漢化的省思." In 『*Zhongguo shi xin lun, Zongjiao shi fence* 中國史新論 宗教史分冊』, edited by Lin Fu-shi 林富士, Taipei: 中央研究院, pp. 259-273.
- Uejima (2010) 上島享 Uejima Susumu 「Bukkyō no nippon ka 佛教の日本化」, 『*Shin Ajia Bukkyōshi jūichi Nippon Bukkyō no ishizu'e* 新アジア佛教史11 日本佛教の礎』, Tokyō : Kōsei shuppansha 佼成出版社, pp. 203-245.